

新宿シアター・トップス提携公演

あなただけ今晚は

Part. 8

枝豆のじいびと

(一九九八年)

演出 宮田慶子

〔人物〕

東雲しのぶ

潤三じゅんさん(64)

東雲

街子(32)

吉行

孝也(32)

〔

街子

〕

風鈴、ちりりんツちりりんツと鳴く。

M (♪NON NON LETA) ↓IN

茶ダンスの上に置かれた写真たて。

写真たてにおさめられた一枚の写真。街子を囲んで、父と母が笑っている。

明かり、広がると、膝をかかえている街子。

街子・・・写真たてを、ぱたんと倒す。

暗転。

M ↓FOして、再び、明かり入る。

東雲鍼灸院の奥の茶の間。五月下旬の昼。

雑然とした茶の間である。襖は、色あせているし、座布団もぺちゃんこ。ぬぎっぱなしのパンツなんかもありそうな一室だ。

茶ダンスの上に写真たて。

しかし、それにおさめられている写真は、母ひとりもの。写真たての前に、お水とご飯と線香が供えられてある。

ちゃぶ台の脇に、新聞紙にくるまれた枝つきの枝豆と、ザルに入った枝から取られた枝豆の一盛り。

時計、十二時半頃をさしている。

鍼灸医の父、東雲潤三、白衣を来たまま、治療室から、上がってくる。

潤三
（治療室の方へ）おい、孝也、昼飯、食ってけ。

軒下の風鈴がちりりんと鳴る。

潤三
風、出てきたな？天気予報で今夜は荒れるって言ってたが
・・・メイストームってやつか・・・。街子が産まれた日も
こんな嵐の晩だったっけな・・・。

潤三、台所へ。

水音。続いてコンロを点火する音。

吉行孝也、腰をさすりながら茶の間にくる。

潤三（声）
街子のやつ、正月にも帰ってこなかったくせに、いきなり
帰るなんて言うからよ・・・

潤三、戻ってきて

潤三
（残りの枝から枝豆をとりながら）なんか臭いとおもった
んだ。そしたらいきなり“あわせたい人がいる”ってだろ。
それでオヤジさんは、なんて言ったのさ？

潤三
“そうか”って。

孝也
そんだけ？

潤三
ああ。

孝也
相手のこと聞かなかったの？

潤三 聞こうとしたら、街子のやろう、ばちんと電話を切りやがた。

孝也 へーえ、ばちんね（テレビつける。“笑っていいとも”をやってる）

潤三 ……消せ。

孝也 タモリってアデランスなんだってさ。全然、わかんねーよな。

潤三 こういう自然に見えるやつは高いんだ。

孝也 あ、電話したね、ミヨイクログロに。

潤三 するか。聞いた話だ（テレビ、消す）なあ、相手のことをなんにも話さねえってのはおかしくないか？

孝也 まあね。

潤三 名前くらい言わねえか普通。

孝也 帰ってきてからゆっくり話すつもりなんだよ（テレビ、入れて、ノーテンキにわらったりしてる）

潤三、無然とする。

台所から、お湯の沸く音、シューシュー。

潤三、枝豆のザルをもって台所へ。

孝也 （寝ころがって、来々軒のメニューを取り）俺、中華丼にしようかな・・・（腰を摩り）あー、だいぶよくなったわ。

こわばってる感じがひいたもんな（メニュー見ながら）オヤジさん何にする？中華丼でいい？ねー、なんにするよう。

潤三、お盆にご飯を盛った茶碗とお新香、急須をのせてやってくる。

潤三 (テレビ消す) なんの商売してんのか、年はいくつなのかくらい言ったってよさそうなものじゃないか。

孝也 ……。いそがしかったんじゃないのお。デイズニールンド、ゴールデンウィークはすごい人出だったろうからさ。電話してきたのは一週間前だ。ゴールデンウィークが過ぎて、暇がとれたから電話してきたんだろうよ。そんなじゃなきゃ、土曜に休めるはずがねえ。

孝也 そんなじゃ、街ちゃん、明日、相手の男と一緒に帰ってくるつもりなんだ。

潤三 いや、街子は今日帰ってくると言ってた。なんでも、俺に会わせる前に話しておきたいことがあるらしい。

孝也 ふふうん……。
なんか、臭いじゃねえか？そう思わないか？

孝也 まあね。

潤三 相手の男のことを妙に隠しやがる。やばい仕事でもしてるやつなのかな。

孝也 さあねえ。けど、ゼータク言える年でもないんじゃないの。街ちゃん、もう三十二だからね。

潤三 三十二？そんなになるか？
孝也 なったよ今月。俺と誕生日、一緒だもん。

潤三 お前も、三十二か・へええ。
孝也 なんだよ。

潤三 治療台の上にしょんべんもらしてたガキが三十二とはねえ。

孝也 ……ガキン時は、皆なそんなもんだよ…。

潤三 (思い出をなつかしむふうに) いや、お前だけだがな…

そうか…おまえも、自分のしょんべんがしみ込んだ治療台にのつかって、腰に鍼うたれる歳になったかあ。

孝也 とつかえろよッ、新しいのとッ。

潤三 ガキにしょんべんもらされたくらいで、いちいちとつかえてられるか。

孝也 …一度か二度だろ…。

潤三 インや、十ぺんはもらしたぞ、お前は。

孝也 ……。街ちゃんが意地悪するからだよ。治療台の上でふたりして遊んでるだろ。そすつと知らないうちに、俺の靴、隠して下りられないようにすんだよ。それなのに、オヤジさんには、男が泣くなって怒られてき。

潤三 よく泣いてたなあ、お前。あれ、街子に靴隠されたからだったのか。

孝也 そうだよ。

潤三 情けねえやつだな。

孝也 ナイーブなんだよ。

潤三 ふううん…あのしょんべんガキが、もう三十二かあ… (立ち上がった) かしなんだぞ、三十二ったら、街子が生まれた年だ(台所へ)おい、孝也、俺は、おまえの年で街子産んだぞ。おめえは、なにやってんだかな、いい年こいて。

孝也 産んだのは、オヤジじゃねえだろッ。

潤三（声） のぶえは、三つ上の三十五だったから・・・まあ、マルコー
ってやつだったわな。今は言わないんだってなマルコー。

潤三、茹で枝豆の鉢を持って来る。

潤三 ま、食え（ト、孝也と自分の茶碗に茶を注ぎ新聞をひろげ
て）長嶋さんがなあ、どうしてくれますか、今シーズンは。

（お茶漬けをすすり）ジャイアンツが勝ってくんないと、
東十条少年野球団も元気が出ねえぞ（枝豆を食べる）辛え。
なんだこりや、塩ふりすぎた。塩っからい汁がぴゅつとで
やがる・・・（噛んで）げ、茹ですぎだ。

孝也 ・・オヤジさん、これ、昼飯？

潤三 んー？（新聞読んてる）

孝也 人のことさそつといて、たくあんだけで食えつてののかよ。

潤三 （枝豆を食べ）これがあるじゃねえか。しかし、ほんと辛
えぞ。食ってみな。

孝也 俺は来々軒とるよ・・・けど、いつこじや出前嫌がるな。

（メニューを潤三に見せて）オヤジさんもなんかとれよ。

茶漬けにあう中華ってーと・・・。

潤三 ねえよ、そんなもん。

孝也 レバニラ・・・は、ちよつとな・・・酢豚、酢豚なんかどうだ？

潤三 街子がああ、これだけは、うまく茹でてな。ちよどいい
塩加減なんだ。のぶえがおしえたんだが・・・街子の取り柄
はこれだけだな（鞘をちゅうと吸って、お茶漬けをすすり）
お、こうすりゃ、いけるッ（孝也の丼を箸で指して）ふや

けるぞ。

孝也、立ち上がり、台所へ。

孝也（声） なー、オヤジさん。

潤三 あー。

孝也（声） 街ちゃんの相手つてのさ、もしかして、妻子持ちなんじゃないの。

潤三 え・・・。

孝也 （鮭缶とマヨネーズを持って来る）だから、話しづらかったんじゃないのか。

潤三 （孝也を見る）

孝也 （鮭缶をあけながら）こみいってんじゃないのかあ？ま、女も、三十二になると、まわりの年がつり合う男はたいがい妻子持ちだしさ、会社じゃ、お局さんなんてよばれちゃって、結構きついらしいしね。妻子持ちとわかってても、すがりたくなる、悲しいお局さまのサガ・・・

潤三 （遮って）街子はデズニerlandだぞ。アメリカに、お局さまはねえだろ。

孝也 東京デイズニerlandだよ。正確には千葉な。街ちゃん、あれで案外、情が深いところあるからね。妻とは別れるつもりです、なんて頭さげられたら、どつするよ、オヤジさん。

（マヨネーズをにゆるにゆるとかける）

潤三 ……そういうもんかけて、うまいか。

孝也 うまいよ（新聞を読みながら食べる）

潤三　それで茶漬け、食うのか。

孝也　そだよ。

潤三　・・・鮭缶は、骨がうまいな。

孝也　あ、でっかいのがあった（ト、食べる）

潤三　台風の晩に食ったな・・・

孝也　ん？

潤三　忘れたのか？さと子さんが・・・お前のかあさんが出してくれたじゃないか、これ。

孝也　そうだっけ？

潤三　そうよ。台風が来ると、俺がお前のうちに行ってやったろ？母ひとり子ひとりのうちじゃ、さぞ心細いだろうと思って俺は行ってやったぞ。

孝也　そういやそうだった。それで、翌日、俺、決まって、街ちやんにいじめられんだ。うちのとうさん、取らないでよってさ。けど、なんで、オヤジさん、台風になるとうちに来てたの？

潤三　（応えず）俺が行くと、さと子さんが、必ず、これ（鮭缶）を出してくるんだ。それで、小皿にとりわけて、嬉しそうにしてるんだ。俺の小皿がちよつとでも欠けてたりするとさと子さん、慌てて、自分のととつかえたっけな。俺は、この骨んとこを、お前の皿に入れてやってよ、子供にはカルシウムをくわせなきゃだめだぞって・・・へへへ。

孝也　それ、浮気だな。

潤三　（ギクツとして）なんだと。

孝也　精神的な浮気だ。

潤三 ば、ばかいうんじゃねえツ。俺とさと子さんはそんなんじやねえぞツ。

孝也 (のぶえの写真をちらツと見て) おばさんの前で話せる話？

潤三 あ、あたりまえじゃねえか。俺はいつだってちゃんと、のぶえに、お前んちの様子を見に行ってくるよとことわってから出かけていったんだから(のぶえの写真に) そうだよな、のぶえ・・・。

風鈴、ちりん・・・と鳴る。

潤三 十年前・・・いまわの際に、さと子さんは言ったもんだ。わたしが死んだら、孝也は天涯孤独になる。どうか潤三さん、孝也を頼みます・・・。だから、俺は言ってやった。水臭いことをいうな、いっそ、この際、孝也をひきとろうじゃないか。孝也と街子は、同じ産湯をつかった仲だし、それに、どういうわけか目が離れてるとこなんざそっくりだ。だからは、孝也を俺の息子と思って、立派に育てていくから、心配しないでとつとと、あっちへ行きな。

孝也 そんなこと言ったのか。

潤三 悪いか。

孝也 死にそうな人にとつとと行けだなんて、ずいぶんじゃないか。

潤三 へんに呼び止めるほうが、よっぽど悪い。

孝也 そりゃそうかもしれないけど、普通、言わないよ、そんなこと。ま、どっちでもいいけどね。かあさんが死んだのは

もう、十年も前のことなんだから。

潤三

あの時、俺が、うちへ来いといったのに、お前は、がんと
して聞き入れなかったな。

孝也

だって、俺、もう二十歳すぎてたんだぜ。就職先だって決
まってたしさ。なにも、オヤジさんに引き取ってもらわな
いでも、ひとりでやっていけるよ。それに、こんなうちに
来たら、生きてる心地しねえもん。

潤三

なんで？

孝也

毎日、街ちゃんにいじめられて、オヤジさんにドヤされて。
そりゃ、お婆さんは優しい人だったけどさ、そのぶん、あ
とのふたりがひでえもん。三年前にお婆さんが死んだ時、
俺は俺の選択が正しかったと痛感したね。

潤三

・・・(枝豆を食べる)

孝也

オヤジさん、枝豆、好きな。

潤三

ナイターが始まったら、毎晩、これとビールだ・・・ずつ
とそうしてきた・・・。

風 ひゆう・・・

風鈴、ちりんちりと鳴る。

孝也

今日はナイター無理じゃないか。神宮だろ？

潤三

ヤクルト戦だ。やらんわけにはいかん。

ト、表の戸があく。

街子（声）　ただいまあ・・・

ふりかえる潤三。

孝也　お、帰ってきた、帰ってきた。

街子、入ってくる。

街子　帰りましたあ・・・

潤三　・・・おう。

孝也　よ、街ちゃん、久しぶりだな。彼氏できたって？

街子　（鮭缶を見つめ）・・・鮭缶・・・（二階へ消える）

孝也　・・・。なんだよ、あの態度（ト、鮭を食べようとして）

・・・これ、街ちゃんのなの？

潤三　なにが（二階へ上がってしまった街子を気にしてる）

孝也　この鮭缶、街ちゃんの？

潤三　・・・この家のものは全部、俺のものにきまつてる。

孝也　だよね（ト、食べ、潤三に）食う？

潤三　マヨネーズなんかかけやがって。台無しにしやがって。食

え、カルシウムだ。

孝也　・・・いただきます。

潤三　おい、孝也。

孝也　なんだよ。

潤三　街子・・・ちよっと見ないうちに・・・かわったな。

孝也　え？

潤三 やせたんじゃないか・・・。

孝也 そお？前からあんなもんだったんじゃないの。

潤三 いや、やせた。去年の秋に帰ってきた時には、もう少し、ふっくらしてた。絶対にやせたぞ、あいつ。

孝也 ま、女ざかりだしね。

潤三 なにに女ざかりイ？

孝也 いや、だからさ、きれいになったって、そういうことだよ。

潤三 なんてきれいになるんだッ。

孝也 そんなこと知るかよ。

潤三 なんもしらんくせにいい加減なことを言うなッ。

孝也 ・・・・。俺、帰るわ。

潤三 なんでだッ。

孝也 オヤジさん、目がすわってるもん。じゃ（立とうとする）

潤三 （とめて）待てッ。なんで、女ざかりだなんてほざいた？

お前、なにか知ってるな。

孝也 しらねえよ。

潤三 ほんとか。

孝也 俺が、知るわけねえだろッ。

潤三 ・・・・（二階をちらと見て）なにやってるんだ、あいつは。

孝也 しらねえよッ。俺、帰るからさ（ト、立ち上がった瞬間）

うっ（腰をおさえる）

潤三 どうした。

孝也 い、いで・・・。ギクッてきた・・・いて・・・

潤三 （手を貸して）動くな。そつとしろ、そつとだ。

潤三、座布団を敷いて、孝也を横たえる。

潤三 急に立ち上がるからだ。せつかく治してやったのに。ばかめが。

孝也 くそう・・なんだようッ。

街子、二階から下りてくる。

街子 なにやってんの？孝ちゃん。

潤三 ギックリ腰だ。

孝也 さつき、治療してもらったばかりなんだぜ、どうしてくれんだようッ。

潤三 じっとしてろって言うてるだろ。落ちついたら、みてやるから、暫くそうしてろ。

街子 (ふんと鼻で笑って) 孝ちゃん、赤羽のお店つぶしちゃったんだってね。

孝也 え？

街子 メグツペから聞いたよ。

孝也 あのおしゃべり！

街子 やっぱ、孝ちゃんのカじや、店一件は無理ってことか。
孝也 俺の店じゃねえもん。支店長、まかされてただけだもん。

街子 よけい悪いじゃない。
孝也 バブルのせいだよ。

街子 バブルは、ずいぶん前よ。
孝也 ずっと尾をひいてたのッ。

街子 ふうん。やっぱ、風俗は弱いね。

孝也 風俗じゃねえよ。普通の居酒屋だよ。

街子 けど、従業員の女の子に、こーんな短いはっぴ着せてたつて、メグツペが言ってたよ。

潤三 なんだ、お前。そんないかがわしい店、やってたのか？ちがうよ。はっぴの下にちゃんとスカートはいてたよ。

街子 超ミニだつて。

孝也 そ・・ういうのは、女の子の自由だよ。

街子 ノーパンしゃぶしゃぶつてのもあるらしいから、ノーパン居酒屋があつても不思議じゃないけどね。

孝也 そういうんじゃないつて言ってるだろツ。

潤三 天国のさと子さんの顔に泥を塗るようなことをすんじゃねえぞ。

孝也 だからツ、そういんじゃないつて。

潤三 孝也ツ、もしかして、お前が十年前、俺と住みたくなかつて言ったのは、そういういかがわしい商売をやりたかつたからなのか？俺の目を盗んで、お前つてやつは悪の道に・

孝也 なんでそこに繋がるんだよ。

街子 どうさんは、孝ちゃんがうちにこなかつたこと、すごくネにもつてんだよね。あたしが、ひとり暮らしするつて言つた時にはとめもしなかつたのに。

潤三 とめたつて聞かねえくせに。

孝也 街ちゃんだつて、おばさんが死んだら、家出たじゃないか。オヤジさん残してさ。ひとり娘のくせして。

街子 どうさんと・・ふたりで暮らすのなんか・・嫌だつたんだ

もん。どうせ、毎日ケンカするにきまつてるし・・・。

孝也　ほうら、みろ。自分だって、ひとり暮らしたかったんだ。

俺のこと、あれこれいう資格あんのかよ。

街子　孝ちゃんは、ちっさい時から、とうさんのお気に入りだっ

たんだから、一緒に住んであげたらよかったのよ。

潤三　俺がいつ、おめえらと暮らしたいと言った。

街子　だって、孝ちゃんがへんなこと言い出すんだもん。どうせ

とうさんは、あたしがいなくなってせいせいしてるんだか

ら、別にいいのよ。そうよね、とうさん。

潤三　ああ。お前なんかいても、役にたたんからな。飯を作るわ

けでも掃除をするでもなし。娘らしいことなんぞ、なにひ

とつやるやつじゃねえんだから。

街子　ほうらね。それに・・・あたしは、勤め先が千葉だから、遠

いから、引越したのよ。孝ちゃんなんか自転車で通える

距離じゃん。

孝也　街ちゃんだって、京浜東北で東京に出て、またJRに乗換

えりや、一時間ちよつとじゃないか。

街子　なにもそんなにJRを儲けさせること、ないじゃないのよ。

それに、会社の付き合いで、遅くなることだってあるし。

孝也　へーん。

街子　なによ？言いたいことがあんなら言いなさいよ。

孝也　ふーんだ。俺、腰痛て。

街子　・・・。(枝豆をつまんで)なに、これッ。かつら一いッ。

だれ茹でたの？とうさん？

潤三　他にだれが茹でるよ。

街子 だめだよ、こういうの食べてちや。血圧あがるよ。捨てる

よ（台所へ）

潤三 お、おい・・・。

孝也 へーええ・・・。

潤三 なんだよ。

孝也 やっぱ、かわったよ、街ちゃん。オヤジさんが言ったとおりだ。

潤三 ・・・・？

孝也 街ちゃん、オヤジさんの体のことなんか心配したことなかっただろ。

潤三 え？

孝也 女ってのは、恋愛すると、妙に世話好きになんだよな。それも、相手の男だけじゃなくて、まわりにまで・・・。鬼の街ちゃんも例外じゃないとはねえ。

潤三 ・・・・。

街子、のほほん茶をのみながら来る。

街子 のほほんのほほん。

孝也 まっちこちゃーん。

街子 気持ち悪い声、出さないで。

孝也 ね、街ちゃん。実は俺さ、街ちゃん、会わせたい人がいるなんて言ってるけど、また、見栄はってんじゃねえかって、ちらっと思ってたんだよ。けど、ホントに男できたな。

街子 え？・・・話したの、とうさん。

潤三 (知らん顔)

孝也 ね、どんなやつさ？

街子 そういうこと、あんたに関係ないんじゃないの。

孝也 あれえ、なんで隠すの？やっぱ不倫なんだ。

街子 え(ちよつとギョツとする)

孝也 当たりだ当たり。オヤジさん、俺の推理した通りでしょ。

街子 なに言ってるのよ。

孝也 あ、ムキになった。ムキンなったよ、オヤジさん。やっぱ

凶星だ。そうだよなあ、不倫は大変だよなあ。なんてった

って、相手には家庭があるもんな。それで、男のために、

アパートでひとり暮らしを始めたってわけか。

潤三 なんでそうなるんだ？

孝也 わかってねえな、オヤジさんも。アパートのひとつでも借

りて、男にとって安息の場つてのをつくつとかなきゃ、奪

えるもんも奪えないじゃないか。街ちゃんとしては、男を

女房から略奪しなくちゃなんないから、こりや、普通の恋

愛みたいに悠長なこととしてられないわけだよ。そうか、そ

んでこのたび、街ちゃんの実力が見事、実を結んで、男が

やっと女房と別れてくれたってわけだな。いやいや、おめ

でどう。よかったな、街ちゃん。

この孝也のオシヤベリ中に、潤三の表情、こわばってくる。

街子 とうさん、このオシヤベリ野郎の腰、二度と立たないよう

に、鍼うってやって！

潤三 え・・・(腕まくりして) よ、よーし。

孝也 や、やめてよッ。なにすんだよッ。

潤三、孝也を部屋の隅にころがす。

孝也 なんだよッ、ホントのこと言っただけじゃないかッ！痛ッ！

いてえよッ！やめてったらッ！

潤三、孝也を座イスの背で固定する。

潤三 そこで黙ってる。

街子 そうよ。静かにしてなさいよッ。

孝也 くそう。だから、やなんだよ、このうちはッ。

街子、ふんとしてちゃぶ台の前に座る。

潤三と目があって・・・どちらからともなく目をそら

す。

気まずい間。

街子 ・・孝ちゃん、こないだ高校の同窓会あったってね。

孝也 (応えない)

街子 皆な、元気だった？

孝也 (応えない)

街子 おい、孝・・・なによ、返事くらいしたらどうなのよ。

孝也 黙ってるって言ったろ。

街子 ……。

潤三 ……。(テレビをつける。“ごきげんよう”をやっている。小堺の声聞こえてくる) ……こいつもつけりやいのにな(アデランス)なあ、孝也。

孝也 (しらんぷりしている)

潤三 (街子に)全然、わからないのがあるそうだ。もつとも高
いがな。ははは。

街子 へえ。ははは。

ふたり、空笑いする。

孝也、ずりずりとすってきて、テレビを消す。

孝也を見るふたり。

孝也、ずりずりともとの位置に戻る。

潤三 (茶を一口すすり)それで、その、街子。

街子 今夜、荒れるみたいね。天気予報でそんなこと言った。

五月に嵐なんて珍しいね。

潤三 ああ、珍しい・・・まあ、今夜だけだろう。明日は晴れる。

街子 だといいけど。

潤三 え？

街子 ……。

気まずい間。

潤三 街子。

街子 えっ……。

潤三 ……なんだ、その……。忙しいみたいだな。

街子 え……ま、まあね。

潤三 それで、話つてのだが……

街子 えっ。

潤三 その……あれだ……なんて言ったかな、あれ。耳のかい鼠。

孝也 ミツキー・マウスくらい覚えろよ。

潤三 (じろつと孝也を見る) お前、今でも、あれが踊つてるところで働いてるのか。

街子 ミツキーマウス・レビューは去年まで。今は、ワールドバザーの方。

潤三 ほう……そうか。なるほどな。

孝也 違いわかってんのかよ。

潤三 (じろつと見る)

街子 ミツキー・マウスレビューの方がおもしろかったけどね。まあ、しょうがないわ。

潤三 そうだな、仕事だからな。しょうがないな。

街子 うん……。

孝也 (♪ミツキマウスミツキマウス……と口笛を吹く)

ふたり (孝也を見る)

潤三 ……。その……なんだな、街子。

街子 え……。

潤三 ……元気でやっつてるみたいだな、デズニーは。

街子 うん……まあね。

孝也 ウォルト・ディズニーはとっくに死んだよ。

潤三 うるさいんだよッ、お前は！

街子 言いたいことがあるんなら言いなさいよ。

孝也 言いたいことがあるのは、街ちゃんの方なんじゃないの。

街子 ・・・・。とうさん、あいつ、帰ってもらってよ。関係ないんだから。

孝也 帰りたいのはやまやまですけどね。

潤三 孝也の腰はタチが悪くてな、すぐにギックリきやがる。暫

くは安静にしてた方がいいな。

街子 暫くってどれくらい？

潤三 まあ、二、三日は・・・。

街子 二、三日!?だ、だって、明日は、野村さんが来るのよッ。

潤三 (呟く)野村?・・・ヤクルトか気に入らねえな。

街子 こんなやつがここに転がってたら、なにごとかと思うじゃないのッ。

孝也 すんませんねえ、大事な日に。

街子 (孝也をひっぱりあげて)立ちなさいよ。ほら、おぶって

あげるから、家に帰るのよッ。

孝也 ひーッ、病人になにすんだようッ!

潤三 こら、やめろ。無理に帰しても、ひとりじゃ、便所にも行けないんだぞ。

街子 だってッ。野村さんになんて言うのよ。間拔けな男がひとつ転がってますけど気にしないでくださいって言うの?あたしたちが大事な話をしてる時も転がってますけど、大目に見てやってくださいって言えってのッ。なんでこんなに

間が悪いのよッ。情けないったらありやしない。

孝也 俺がいつとう情けないよお、オヤジさーん。

潤三 弱いものいじめはやめなさい、街子。

街子 ふんッ。

潤三 そうだ。二階に通したらどうだ？二階のお前の部屋ならいいだろ。

街子 どこ通って二階に行くのよ。ここ通らなきゃ行けないじゃないさッ。

潤三 そうか……。それじゃ、敷布をかぶせて隠そう。いや、敷布はへんだな……。そうだ、でっかい風呂敷が押入れにあつたろ。あれで、こいつをくるんじまえばいい。

街子 でっかい風呂敷って唐草模様のやつ？

潤三 そうそう。布団が置いてあると思うだろう。

街子 なんで布団が置いてあるの、ここに。

潤三 ……なんでだろうな。

街子 そんなアヤシイ真似ができると思ってたんのッ。もういいわよッ（出ていこうとする）

潤三 どこいくんだ。

街子 駅前にレンタルスペースってのがあったでしょ。あそこ予約してくるッ。

孝也 そっちの方がよっぽどアヤシイじゃないか。女の家に向いて、レンタルスペースに通されてみる。こりゃ、なんかよっぽどすげえ秘密があるって疑われるぜ。

潤三 そうだ。痛くもない腹を敵にさぐられるのは、我慢できんぞ、俺は。

街子 敵？今、なんて言った、とうさん。

潤三 ……。

孝也 野村なんて名前だからいけないんだよなー、オヤジさん。

（突然）あー、そういえば、あそこ、今やってないわ。

街子 え？

孝也 レンタルスペースだったビル、今、ヤクルトの販売所だ。

二階から上はカラオケになっちゃったよ。

潤三 カラオケ？

孝也 うん。去年の暮れから閉めてるなーと思ってたら、そうそ

う、あそこ今、カラオケボックスだ。

潤三 駅前にカラオケが・・・できたのか？

孝也 うん。確か、先月、開店してたよ。

潤三 それは知らなかったなー。なんだよ、駅前にできたのか

よ。ずっと、二十分も歩いて環七の店まで通ってたんだぞ。

そうかあ、できたか、駅前に。灯台もと暗しとはこのこと

だな。肉屋の源蔵、知ってたのかな。あいつは情報が早い

から知らないわけではないぞ。俺に秘密にしてやがったな。

床屋のじっちゃん、あれは知らないな。いやあ、便利にな

るなあ。おい、孝也、どんな店だ？ガキの溜まり場みたい

なのだと困るぞ。多少高くても、大人が行ける店じゃない

とな。いや、ガキに占領される前に、俺たちが通わなきゃ

なるまいな。オヤジとオバンの店にしちまえばガキはより

つかないからな。こりゃ、いそがしくなるぞ。そうかあ、

できたかカラオケ・・・堀内孝雄の新曲あるかな。

街子 ……（冷やかに）とうさん。

潤三 あ？

街子 なんなの、いったい。

孝也 やばいよ、オヤジ。

潤三 （街子の険しい眼差しに圧倒されて、孝也に）なんでとめない、このばかめッ。

街子 どうさんは毎日、何考えて生きてんのよ。明日があたしにとつてどういう日か、どうさん、わかってるの。

潤三 ……。

街子 （茶の間を見回して）……一週間前に電話したよね、会わせたい人がいるって、今度の土曜に家に来てもらうって。カラオケやつてる暇があったら、襖、張り替えといってくたつていいんじゃないの？座蒲団、新しいのにしといてくれられたつていいじゃない。掃除くらいしといてよッ。それじやなくつたつて、こんな古くて汚い家、恥ずかしいのにッ。

潤三 恥ずかしい？

街子 だらしのないのよ、とうさんは。物を片づけるつてことしな
いんだもの。かあさんが入院してた時なんて、この家、ゴミ溜めだった。

潤三 お前が片付けりゃいいことじゃねえか……。

街子 あたしはかあさんとは違うわよ。とうさんの奴隷じゃないんだからね。とうさん、外面がいいから、病院じゃマメに世話やいて、同室の人からの評判よかったらしいけど、かあさん、留守にしてる家のことずっと気にしてた。かあさん、死ぬまでとうさんの汚れたパンツの心配してたわ。

孝也 それつてさ、街ちゃんが、おばさんのかわりにやらないか

らじゃ・・

街子

あんたは黙ってなさいよッ。とうさんて昔っから外面ばかりいいのよね。あたしとかあさんってものがありながら、さと子おばさんから頼りにされるといい気になって・・。台風の時なんか、いつだって、孝ちゃんちにとんでっちゃったわよね。孝也んとこは、母子家庭だから、なにかと心細いだろうなんて言ってさ。あたしとかあさんだつて心細かったわよ。風、びゅうびゅう吹いてさ、この家、ボロだからガタガタいってさ。玄関には水が上がってくるし。サリーちゃんの運動靴、びしょ濡れになっちゃったのよ。外人なんかの靴を放っておくからだ。

街子

外人？

孝也

（潤三に）外人、ちゃうちゃう、アニメの。

街子

（溜め息）今度のことだって、どうせとうさんは気に入らないんでしょ。つきあってることも話さないで、相談もなしで、いきなり結婚したいなんて言ったもんだから、おもしろくないのよね。けど、とうさんなんか相談してなんになる？どうせアラさがしするだけじゃない。でもね、あたしは、もうずっと前から決めてたの。結婚するんなら、とうさんと正反対の人ってね。外面なんてよくなくていい、女房子供のことを一番に考えてくれる人と結婚するんだつて。

潤三

・・・そんなに偉いのか。

街子

え？

潤三

（怒鳴る）その野村って男は、そんなに偉いのかと聞いて

るんだ！

孝也 オヤジさんッ（とめる）

潤三 （振り払って）女房子供を一番に考える男がいいだとか？ばか抜かすな。男は皆な、本当はそう思ってるんだ。口には出さなくても、ちゃんとそう思ってるんだ。ただ、一番じゃない場合も時々はあるんだ。けど、そういう時だって、二番目か三番目には、ちゃんと思ってるんだッ。

街子 一番と二、三番は違うわよッ。

潤三 こまかいことをグチャグチャ言うなッ。なんにもわかったらんくせしてッ。もういいッ。俺は会わんッ。俺は、その野村って奴には会わんぞッ。この馬鹿むすめが、くだらない男にひっかかりやがって！

街子 会ってもいなくせに、くだらないなんて、なんでわかるのよッ。

潤三 わかるッ。だいたい、野村なんて名前のやつにろくなのはいないんだ！

街子 名前できめないでよッ。

潤三 うるさいッ。でてけッ！

潤三、飛び出していく。

孝也 オヤジさんッ。

街子 でてけて、自分が出てったわよ。ばかみたい。

孝也 しょうがねえオヤジだな。午後の診療どうすんだよ。

街子 ふんッ。

孝也 街ちゃんも言い過ぎだぞ。

街子 ……とめなさいよ…。

孝也 あ？

街子 そう思ったらとめりやいいでよッ。

孝也 ……。街ちゃんてオヤジさんとそっくり。自分勝手など

こ、そーつくりッ。

街子 ……。

孝也 臨時休診の札、出しときなよ。夜まで戻ってこねえよ、オ

ヤジさん。ま、今日は『マイウエイ』だな。

街子 マイウエイ？

孝也 カラオケ。

M

暗転。

〔二〕 孝也

東雲鍼灸院の茶の間。夕刻。

孝也、寝ころがって漫画を読んでいる。

街子、ちゃぶ台の上に広げられた枝豆を枝からはず

している。

風が激しくなっている。

時計、七時過ぎをさしている。

街子 (ちやぶ台の上の携帯電話を取り、かける)・・・だめだ。

(切る)

孝也 (漫画を読みながら) まだ留守なの？

街子 (溜め息) こんな雨の中、野村さん、どこ行っちゃってる

んだろうなあ・・・。

孝也 メッセージ入れたんでしょ。

街子 入れたけど、なるべく早く連絡したいのよ。明日、来る気

でいるんだもの、野村さんは。悪いじゃないの。

孝也 やっぱNGにすんだ？

街子 しかたないでしょ。とうさん、あの調子だし・・・あんたは

転がってるし。

孝也 (乗り出して) ね、どんなやつ？

街子 え・・・。

孝也 野村って人。教えろよ。街ちゃんと俺の仲じゃないか。ね、

いくつ？

街子 ・・・・。にじゅう・・・ろく・・・だったかな。

孝也 へえ、年下なんだ。

街子 ううん、年上よ。

孝也 だって、今、二十六って言ったじゃない。

街子 ・・・・。六・五・・・くらいかもしんない。

孝也 え？

街子 六・五だ。そうそう、26・5。

孝也 ・・・・。街ちゃん、俺が顔もしらない奴の靴のサイズなんて聞くとと思う。

街子 やや、よくわかったね。お見事オーツ。

孝也 おちやらけてんじゃねえよツ。何歳かって聞いてんのツ。

街子 (一気に) 三十二ん時の娘が今年で三十二歳。たし算してみなツ。

孝也 ・・・・。六十四・

街子 ご名算。

孝也 ええッ！の、野村ってやつ、六十四歳なの！？

街子 そ。

孝也 お、おい、街ちゃん・痛ででッ。

街子 ほら、動いちゃダメだよ。

孝也 六十四って・・・それ・ひよっとしてオヤジさんとおない年じゃねえの。

街子 あら、とうさんってそんなに若かったつけ。

孝也 調子いいこと言ッてッ。

街子 けどね、不倫じゃないわよ。野村さんの奥さんは、三年前に亡くなったんだから。

孝也 それも、オヤジさんと同じじゃないか。

街子 まあね・・・。

孝也 で、なにしてるのさ。職業はなんなんだよ。

街子 え？・・・えーと・・・ワールドバザールと一緒に働いてる。

孝也 同僚？・・・ディズニールランドって定年ないの？

街子 娘があたしと一緒に働いてるのね。

孝也 (イライラして) その六十四の野村さんの職業はなんなんだって聞いてんだよツ、もうツ。

街子 接骨院。戸塚に住んでるからトツカ・スワローズ・ジュニ

アって少年野球チームの監督もやってるわよッ。

孝也 え・・・(絶句) うわああー。

街子 なに、のけぞってんのよ。

孝也 これがのけぞらずにいられるかってんだ。おい、街ちゃん、野村ってやつ、オヤジさんとどこが違うんだよ。どこが正反対なんだよ。

街子 プロフィールはそっくりかもしれないけどね、人柄は全然ちがうの。

孝也 ふふうん。

街子 野村さんは、三年前に亡くなった奥さんをとて愛してたのよ。今でも命日には、お墓参りをかかさなくらいよ。オヤジさんだって、三年間ずーっと毎朝、おばさんに線香あげてるよ。

街子 唄だつてとてもうまいの。彼のカントリーウエスタン、孝ちゃんにも聞かせたい。

孝也 ・・・・オヤジさんも『マイウエイ』英語で挑戦してるけどな・・・。

街子 なによりも違うのは、野村さんは、とて娘おもいで、あたしとのことも、娘が片づいてからにしたいって言ったのよ。それが、このたびめでたく、サチヨちゃん・娘、サチヨちゃんっていうんだけどね、彼女の結婚がきまつたから、あたしたちもつてことになったの。

孝也 ・・・・その野村って父娘、俺、きらい。なんか目に浮かぶもん。

街子 孝ちゃんに好かれなくなつたつてかまわないわよ。

孝也 オヤジさんだって、きらいだと思っよ、ゼツタイ。

街子 …… あーあ、かあさんが生きていてくれたらな・

(のぶえの写真の方を向いて) かあさん、なんで死んじゃったんだよう。かあさん・あたしととうさんがケンカすると、いつも中に入ってくれた。それで、あとから必ず、街子は悪くないよ、けど、とうさんはああいう人だからって。かあさん・(うなだれる) かあさん・(ふりきるように、顔をあげ、鐘を打って) かあさんッ、あたしの味方なら、あのオヤジ、とつとそつちに呼んじやつてくれようッ(激しく鐘をたたき) たのむよう、かあさんってば!

風鈴、ちりん・と鳴る。

孝也 街ちゃん。

街子 なに？

孝也 悪いこと言わない。その野村って人、オヤジにあわせない方がいい。

街子 やっぱり、そう思う？

孝也 うん、絶対そうおもう。それってただの不倫よかやつかいな気するもん。

街子 あたしたちは不倫なんかじゃないわよ。野村さんは独身なんだから。

孝也 わかってるよ。けどさ、オヤジさんにあわせてみる、血みるよ。駆け落ちでもしちゃった方がずっと平和的だ。

街子 (溜め息)

街子、枝豆のザルを持って、台所へ。

水音。コンロの火をつける。

孝也

・・けどねえ、よりによって、なんでそんな男に惚れるかねえ、街ちゃんは。そんなんだったら、俺の方がずっとマ

シ・・

街子、空のザルをもって戻ってくる。

街子

なんか言った？

孝也

ううん、別に。

街子

ねえ、孝ちゃん。

孝也

ん？

街子

孝ちゃんは結婚しないの？

孝也

相手ないもん。

街子

メグツペ、離婚したってさ。

孝也

ふうん。

街子

メグツペ、今でも孝ちゃんのこと好きなんだよ。

孝也

ふうん。

街子

けど、孝ちゃんがはっきりしてやんないから、別の男と結婚しちゃったんだから。それも、孝ちゃんとそっくな男とさ。それで、離婚して。ちよっと、おばかだよね。

孝也

まあね。

街子

ねえ、ごはんくらい誘ってやったっていいんじゃない。

孝也
え？

街子
メグツペの気持を察してあげなよ。

孝也
……俺とそっくりな男と結婚して離婚したんだろ。

俺とつきあったって無駄なんじゃねえの。

街子
女心のわかんないやつッ。

孝也
(むツとする)

街子
で、あんた。お店、つぶしちゃって、今、なにしてんの。

孝也
……ギックリ腰で寝てんの。

街子
……なんの仕事してんのッ。

孝也
プータロ。

街子
うそッ。この不景気になにやってんのよ。

孝也
不景気だから、プータロなんじゃないかよッ。わかってな

いやッ。

街子
……。ポリネシアン・レストランで皿洗いのバイト募集

してたみたいだけど、聞いてみたげようか。

孝也
悪いけど、俺、一応、板前の免許もってんだ。

街子
カッコつけてる場合じゃないでしょ。腰ぬけのくせして。

孝也
ほんっと口悪いよな、街ちゃんて。だいたい、街ちゃん

とオヤジさんが、すぐにケンカになんのは、街ちゃんの、そ

の口のきき方に原因があるんじゃないのか。

街子
おあいにくさま。口が悪いのは、とうさんゆずりだね。

孝也
野村って人、街ちゃんの本性をわかってないんじゃないの。

それとも、猫つかぶりしてんのかよ。

街子
余計なお世話よ。あんたになんかわかんない、いいところ

があるの、あたしにだって、とうさんにだって。

孝也 あれ？街ちゃんは、オヤジさんが嫌いだったんじゃないんですか？

街子 嫌いよ、嫌いだけど・・・いいところは認めねばなるまい。

孝也 それ、どういうところ？例えば、どういうところさ。おしえてよ。

街子 た・・・たとえば・・・正義の味方。

孝也 正義のみかたあ？俺、そんな恩恵にあずかったこと、いっぺんだってないけどね。

街子 なによ、ガキの時、いっつも金魚のフンみたいに、とうさんのあとばかりくっついてたくせに。いじめられると、とうさんに言いつけて仕返ししてもらってたくせに・・・あー、思い出した。あんたがおしっこもらした時、あたしあんたにパンツ貸してやったわよ。おかげで、すーすーしながら家に帰ったんだから。

孝也 ・・そういうの正義の味方かよ・・・。

街子 恩恵にはあずかったじゃないのさ。だいたいね、あんたが年がら年中、とうさんに甘ったれてたから、うちの家庭の雰囲気悪くなったことだってあったんだよ。かあさんは、我慢強いから、あたったりはしなかったけど。

孝也 そんならいいじゃないか。なんでも俺のせいにするなよ。あたしは、チビだったけど、なんとなくわかってたんだから。

孝也 なにを。

街子 かあさん、内心、おもしろくなかったと思うよ。いっくら、父親がいないからって、いっくら、近所のよしみだから、

らって、とうさん、あんたたちに行き過ぎだったもん。

孝也 そんなことないよ。オヤジさん、台風の夜だけにしかうちにはこなかったよ。街ちゃんと俺が同時にインフルエンザになった時なんか、ずっと街ちゃんの看病してたって。俺、オヤジさんに来てもらいたくって、オフクロに聞いたから、ちゃんとおぼえてるんだ。

街子 そんなの、あたりまえじゃない。あたしはひとり娘なんだからね、いっとくけど。

孝也 わかってるよ・・・だから、ごちやごちやヤキモチやくことないだろ。

街子 ヤキモチなんかやいてないわよ。

孝也 やいてるよ。街ちゃん、ホントはオヤジさんのこと好きなんだよな。

街子 え・・・

孝也 ケンカばかりしてるけど、ホントは、昔っからすっげー好きなんだよ。だから、オヤジさんとそっくりの男にひっかったんだ。

街子 野村さんはどうさんなんかに、全然にでないわよッ。

街子、台所へ。

孝也 似てるねー全然、似てるねーそっくりだねー。

街子、ゆで枝豆の鉢を持って戻って来　・

孝也につめよる。

孝也　な、なんだよッ。

街子　（枝豆をなげつける）

孝也　わッ。

街子　食え。

孝也　・・・（食べる）うっめえーッ。

街子　（にたりとして）だろ。

孝也　やー、ホントうまいよ。

街子　ふふふん。

孝也　なんかコツがあんの？オヤジさんが茹でたのは悲惨だぜ。

街子　ぐらぐら煮たったお湯で茹でるから・・・。

孝也　普通そうなんじゃないの。

街子　普通は知らない。けど、かあさんはそうしなかった・・・。

孝也　どうやるのさ。

街子　枝からもぎたての枝豆をお鍋に入れて、ひたひたのお水と

お塩をちよっぴり。そして火にかけて七分強。お豆がぷっ

くりしたところでザルにあけるの。そして、ひとつまみお

塩をふって、ざっくざっく。燃料も節約になるし、嚙んだ

時、びゅって、汁が出ないよって・・・かあさん。

孝也　（食べて）おやじさんが言ってたのホントだ。街ちゃん

取り柄はこれだけだ。

街子　かあさんのおかげよ（枝豆を皿に盛ったのぶえに供え）か

あさん、味見してみて（手をあわせる）

風鈴、ちりんと鳴る。

街子 (振り返ってため息)・・・どうしちゃったんだろ、野村さ

ん・・・(ト、携帯電話を見つめる)

孝也 街ちゃん。

街子 ん？

孝也 街ちゃん、ホントに、その野村って人と結婚する気？

街子 うん。

孝也 へんなこと言うようだけどさ、街ちゃんが、そいつと結婚

すると・・・オヤジさん、ガツクリくるような気がする。

街子 え？

孝也 なんとなくそういう気がする・・・俺だって、そうだったも

ん。

街子 え？

孝也 メグッペ。

街子 ええ？

孝也 俺、あいつの離婚した亭主知ってんだ。

街子 会ったの？

孝也 去年、町内の忘年会にね、オヤジさんにくっついていった

んだ。駅前の信用金庫の奴だって聞いたから。

街子 へーえ。けっこう未練がましいことするじゃない。

孝也 だって、皆なが、お前にそっくりの男だぞって言うから。

気になるじゃねえ、そういうの。

街子 で、似てた？

孝也 まあね・・・。歳は俺たちよか、少し上みたいだったけど、

信用金庫の奴によくありがちな、腰がひくいってやつ？

街子
ふうん。

孝也
酒強くってさ、俺、どんどん注がれちゃって、つぶれた。

街子
去年っていうと、孝ちゃん・・もう、お店、たたんだ後だ
った？

孝也
うん。

街子
卑屈になつてたんだ。

孝也
かもしんない。

街子
相手の男、あんたとメグツペのこと知ってたんじゃないの
お？

孝也
かもしんない・・。

街子
だから、あんた、そいつにつぶされたんじゃないの。

孝也
かもしんないッ。

街子
ばかだねえ。そんなことになるくらいだったら、なんで、
メグツペと別れたのよ。

孝也
別れてねえよ。むこうが勝手に結婚しちゃったんだよ。

街子
あんたが煮え切らないからじゃない。

孝也
けどさ、なにも俺と似てる男と結婚することないじゃない
か。

街子
そんなの、女の自由じゃない。メグツペだって、いろいろ
つらかったと思うよ。

孝也
けどけどさ、結婚する前に見してくれたっていいんじゃない
いの？

街子
だれに。

孝也
俺・・に。

街子
なにイ？

孝也 見せないまでもさ、せめてそれとなく噂をながすとかさ。
それを急にさあ。

街子 メグツペが、自分と似た男と結婚するってわかってたら、
彼女にプロポーズしたとでもいいたいの？

孝也 ・・した・・かもしんじゃないじゃん。

街子 ほんつとに腰ぬけね、あんたって。

孝也 けど、すつげえ、気分悪いよ。全然、違うタイプだったら
さ、へーえ、あんな男が好みだったんだ、メグツペも、た
いしたことねえなって思えるけど。

街子 よく言うわよ。

孝也 俺に似てるけど、なんだか俺よりちよつと上みたいな男と
一緒になられてみるよ。ガツクリくるぜ。

街子 そうだったんだ、信用金庫。

孝也 なんとなく・・ね。

街子 あー、ばかばか。みつともないったらありやしない。

孝也 なんだよ。街ちゃんだから、恥をしのんで話してるのに、
そういう言い方はないだろ。オヤジさんは、わかってくれ
たよッ、俺の気持ち。

街子 え？

孝也 そりゃあ、女がひどい。男の気持ちを全然わかってない。

よし、あそこの信用金庫とは取引きやめてやるッて。

街子 (あきれる)

孝也 そういうもんだよ。

街子 なにがそういうもんなのよッ。

孝也 けど、そういうもんなのッ。オヤジさんだって、そうだよ。

そりゃ街ちゃんとおヤジさんは、いつもケンカばかりしてるし、街ちゃんはオヤジさんにとって自慢の娘とは言いがたいと思うよ。けど、そういう不出来な娘だっておヤジさんにとっては、たったひとりの娘だもん。その娘がさあ、よりによって自分とおない年で、境遇もそっくりの男と結婚するなんてさ。

街子
野村さんはとうさんなんかに似てないって言うてるでしょ。とうさんなんかより、ずっといい男よッ。

孝也
それがまた、むかつくんだよ。何？家族思いで、立派で、やさしくて？そういうこと、オヤジさんにズケズケ言うかよ。オヤジさんだって、自分の欠点くらいわかってるんだから。残酷だよ、そういうの。

街子
勝手なこと言わないでよ。世の中、あんたやとうさんみたいなのはっかりだったら、女はどうすりやいいのよ。あんなたちみたいなのは、もう、どんな女からも相手にしてもらえないわねッ。

街子、ヤケクソのように枝豆を食べる。

孝也
・・・そんなこと・・・ないよ。

街子
しよってる。

孝也
わかっている女はちゃんとわかっている。

街子
メグツペは馬鹿よ。今度会ったらとくと説教してやるわ。

孝也
メグツペじゃねえよ。

街子
え？

孝也 街ちゃん、ホントは、オヤジさんの気持ち、わかってるんだろ。

街子 え・・・。

孝也 だから、野村さんのことを、オヤジさんに話しづらいんだろ。オヤジさんのがっくりした顔みるの嫌だから。

街子 そ・・・そんなことありませんねー。

孝也 じゃ、なんで、ちゃんと話さないんだよ。

街子 話そうと思ったら出てっちゃったんじゃない。それに・・・
孝也 なんだよ。

街子 世間じゃ、娘の結婚にがつくりくる父親は多いだろうけど、うちの場合は、そうでもないんじゃないの。むしろ、とうさん、街ちゃんが結婚する方がさみしかったりして。全然いいけどね、それでも。

孝也 そっか。街ちゃん、怖いんだ。

街子 え？

孝也 オヤジさんがガツクリするの見るのも嫌だけど、喜ばれたりしても、傷つくんだ、街ちゃん。

街子 まさか。なんで、あたしが傷つくのよ。

孝也 どうしてそういう強がり言うんだよ。オヤジさんが、街ちゃんの結婚に平気な顔でなんかいられるわけないだろ。

街子 そ・・・そうかな。

孝也 そうだよ。

街子 でも、とうさんは小さい時からずっと・・・あたしより、孝ちゃん可愛がってたじゃない。

孝也 また、その話かよ。

街子 だってそうだもん・・・(枝豆の鞘をかむ) ねえ、孝ちやん。

孝也 あ？

街子 どうさんが戻ってきてさ、口きいてくれなかったらさ・・・

あと・・・頼む。

孝也 え？

街子 あたし、明日、帰るから。

孝也 ・ ・ ・ ひよつとしてそれ、オヤジさんに、野村さんのこと話

しとけてこと？

街子 ・ ・ ・ ・ ・

孝也 俺に火中のイモを拾えっての？

街子 栗じゃない？

孝也 焼芋のことじゃなかったっけ？ 焚き火の中の・・・

街子 栗。

孝也 だっけ・・・

街子 (時計を見て、溜め息。傍らの雑誌をめくる)

孝也 なあ、街ちゃん。

街子 なに。

孝也 その野村ってやつ、やめろよ。

街子 え？

孝也 俺反対。オヤジさんだって、絶対反対だ。

街子 意見として聞いとく。

孝也 ・ ・ ・ ・ ・ あーあ、いっそ、街ちゃんと俺が結婚しちゃえば

街子 え？

孝也 そうすりゃ、オヤジさんは安心するし、俺もそこそこまあ

まあって感じだし、街ちゃんも

街子
やだ。

街子、枝豆の鉢をひったくってちやぶ台に起き、孝也に背を向けて食べる。

孝也
・・・ばかばかばか・・・(ト、自分を責める)

街子、携帯電話をかける。留守電・・・切る。

孝也
野村ってやつのこと、俺の口からは、絶対にオヤジさんに

は言えないからな。街ちゃん、ちゃんと自分で話せよな。

街子
わかってるわよ、そんなこと。

孝也
・・・。(携帯電話に目をやって)それにしても、なに
してんだろな。

街子
・・・。

孝也
・・・街ちゃん。

街子
なによ？

孝也
ちよつと・・・。

街子
なんだよッ。

孝也
・・・おしっこ。

街子
ええ？

孝也
おしっこ・・・もれそうッ！

街子
えーッ。

孝也
はやく。ちよつと肩かして。

街子、孝也に肩をかして、腕をとってやる。

にっこりする孝也。

街子、身をひく。

孝也
いててて。

街子
（慌てて腕を肩にかけて）立てないの？

孝也
うん。

街子
どうすればいいの？

孝也
便所までひきずってって。

街子
わかった。

街子、引きずっていく。

孝也「いてて・・」と言いながらひきずられ、途中

で、ズボンを脱ごうとする。

街子
ちよっとツ！トイレでぬぎなさいよツ。

孝也
便器見た途端、出ちやいそうな気、するから。

街子
もおッ（ぐいぐいひっぱる）

孝也
いででえッ！

ト、その時、街子の携帯電話が鳴る。

街子
！野村さんだッ！

孝也をほっぽり出して、携帯電話をとる街子。

孝也

ひーッ！

街子

もしもし・・・あー、よかった。今日中に連絡とれて。実はね・・・え？・・・急な話？野村さんも？あたしの方にも急な話が・・・え？今から？・・・ううん、いいわよ。けど・・・ううん、いい。あたしが行く。池袋まで出るわ。すぐだから。うん・・・うん・・・わかりました。じゃ、すぐ行きます。

※電話の間、孝也は声も出ず、街子に助けを求めてい

たが、無視された。

街子、脱兎のごとく二階にあがっていく。

孝也

ま・・・街ちゃん・・・ちよつと、街・・・

バッグを手に駆け降りてくる街子。

街子

ちよつと出てくる（行ってしまう）

孝也

ま・・・まち・・・ちゃん・・・お・・・おしっこ・・・。

孝也、自力で這っついていこうとするが・・・

孝也

あ・・・力入れるともれちゃう・・・（悶える）

ト、そこへ、潤三、後ろを振り返りながらやってくる。

潤三

おい、街子の野郎、どこへ飛びだしていきやがったん・

(ト、孝也が元転がった場所にいないのを発見して)ん？

孝也

オ、オヤジさん、ここ、ここ・・・。

潤三

孝也ッ。

孝也

オヤジさんッ(救いの神だ)あいたかった！(すがる)

潤三

動くなって言つたらッ、このバカがッ(頭をひっぱたく)

M

暗転。

〔三〕

潤三

東雲鍼灸院の茶の間。夜。

時計、九時頃をさしている。

雨と風、強くなっている。

潤三が、孝也の腰に鍼を打ってやっている。

孝也

いででッ。

潤三

治りたかったら、ちっとは我慢しろ。

孝也 (耐える)

潤三 (時計を見て) 遅いな、街子のやつ……。しかし、なんだつて、あんなに慌てて飛びだしていったんだ？

孝也 さ……。さあ……。

潤三 こんな嵐の中を、どこ、うろついてやがる (鍼をうつ)

孝也 いッ！

潤三 孝也。

孝也 ん……。ん？

潤三 お前と街子は、ガキの頃からの仲だよな。

孝也 え……。

潤三 そうというのは、親にも言えないことも話せる仲ってんじゃないか。

孝也 そう……。かな。

潤三 街子は、お前になにを話したんだ？

孝也 別に……

潤三 (鍼をうつ)

孝也 痛ッ！ひ、ひいいくッ！

潤三 俺をごまかそうだったって、そうはいかないぞ。

孝也 ……い、言うよ、話すからさ……。そ、そのぶつといの、抜いてよおッ。

潤三 よく効くんだぞ。

孝也 抜いてくれよおおッ。

潤三 しょうがないやつだな……。で、話すな？

孝也 話す話すなんでも話す。

潤三 よし。

鉦を抜く。

孝也 (息があらいい)

潤三 それで、街子はなんて？

孝也 街ちゃんの相手の野村ってのはね……。鉦しまつてよ。

潤三 (しまう)

孝也 ホントにしまったね？

潤三 疑り深いやつだな。

孝也 ……街ちゃんはね、不倫してたわけじゃなかった。

潤三 え？…なんだ…ほー、そうか。

孝也 うん…。

潤三 お前の推理なんぞは、やっぱりあてにならないな。

孝也 うん、そう…なんだけどね…。娘がいるんだな、これが。

潤三 なに？街子は後妻か？…まあ、いい。不倫じゃないんなら。街子も年だ。贅沢はいえない。

孝也 だよね。

潤三 ああ。俺にだってそれくらいの常識はある。

孝也 うん…で、その常識ってのだけどね。

潤三 ああ。

孝也 これからの話では、ちよっと、こっちにおいといってもらいたいんだ。

潤三 なに？

孝也 その…娘ってのが、なんとこれが、三十二歳なんだな。

潤三 三十二？

孝也 うん。

潤三 ???それは、男の歳じゃなくて・

孝也 野村ってやつ、娘の歳だ。三十二の時の子供なんだってさ。

潤三 は（慌てて、引き出しから電卓を出す）

孝也 出すなよ電卓をッ。暗算しろよ、俺はしたぞ。

潤三 ・ ・ ・六十四 ・ 。

孝也 ご名算。

潤三 の、野村ってやつは六十四歳なのかッ!?

孝也 それだけじゃないぞ。職業は接骨院で、トツカ・スワロー

ズ・ジュニアって少年野球チームの監督をしてるんだって。

潤三 な、な、な！

孝也 ついでだけど、その三十二歳の娘の名前はサチヨちゃんだ。

潤三 俺は、そいつらには会わんぞッ。絶対、会わんぞッ。会わなくても目に浮かぶッ。

孝也 だろ。俺もそう言った。

潤三 街子の野郎はなんだって、そんな男に惚れたんだ。そんなやつはどこがいいッ。

孝也 オヤジさんと正反対の男だって街ちゃんは言ってたよ。

潤三 そうだ。正反対だ。しかし、妙に俺の真似をしてるところが気に入らん。

孝也 別に、真似してるわけじゃないと思うけど。

潤三 ・ ・ ・そうか、街子のやつ、それで電話で、俺になんにも言えなかったんだな。ふふふ ・ ・ あいつ、俺のまがいもの

にひっかかったのか。あわれなやつめッ。

孝也
それどういう意味？おい、オヤジさん、まさか妙な自信つけちゃったんじゃないだろうね。

潤三
ふふふん！

孝也
街ちゃん、野村さんは、オヤジさんよりずっといい男だつて言つてたよ。やさしくて、家族思いで、カントリーウエスタンだつて。

潤三
ふふふんッ。

孝也
ガックリこないのかよ。

潤三
だれがッ！付き合つてる時なんてのは、いいとこばっかり見せるもんなんだ。男はたいいそうだ。一皮むけば、皆な、おんなしようなもんだ。で、街子はどこへ行きやがったんだ。

孝也
知らない。野村から電話がかかってきて、慌てて飛びだしていったよ。急な話とか言つてたみたいだった。

潤三
・・話はそれだけか。

孝也
うん。

潤三
ふうん・・。よし、尻出せ。とびっきり効くやつを打つてやるから。

孝也
え！また打つの！

潤三
（無視して、孝也をねじ伏せ）・・だいたい、娘なんぞと
いうものは、父親をこの世で一番の男だと思つてるもんなんだ。そうか、街子のやつ、俺にそっくりの男に惚れたか。
わっはっは（鍼をかまえて）極めつきだ！いくぞッ！（打つ）

孝也　ぐええーッ！！

ト、表で、タクシーが止まる音。

潤三　？

鍼を孝也の腰に打ったまま、立ち上がって表を覗く。

孝也　オ・・・オヤジ・・・さん・・・。

潤三　おい、街子が帰ってきたみたいだぞ。

孝也　ちよ・・・ちよつと、コレ・・・。

潤三　おお、そうか（抜く。表を気にしている）

タクシーのドア、閉める音がして、発車音。

街子、入ってくる。疲れきった様子だ。

潤三　？・・・。

街子、ちゃぶ台の前に座り込む。

潤三　（小声で）どうしたんだ、あいつ。

孝也　さあ・・・。

潤三　へんだぞ。

孝也　うん。

潤三　なにがあったんだ？

孝也 さあ・・・。

潤三 考えろ。

孝也 しらねえよ。

潤三 推理するんだ。

孝也 わかんねえよ、そんなの。

潤三 なんだとお？（鍼に手がかかる）

孝也 （思わず）や、やめてよッ！

街子、ふたりを見る。

潤三 ・・・・よッ。

孝也 ・・・・やッ。

街子、深い溜め息をつく。

顔を見合わせる潤三と孝也。

街子 孝ちゃん。

孝也 あ、はいなに？

街子 今日・・・ずっと連絡とれなかったでしょう、野村さん。

孝也 あ・・・うん、そうだったね。

街子 知り合いの人がね・・・急に亡くなったんですって。野村さんが、ずっと親切にしてあげてた人で・・・まだ、四十歳だったんですって・・・。

潤三 そりゃまあ・・・大変だったな、この雨の中をな（孝也に）なあ。

孝也 うん・・・

街子 その人の・・・死んじゃった人の旦那さんね・・・すっごい放蕩者で・・・ずっとずっと、彼女のこと、苦しめてきたんですって。

潤三 彼女？

孝也 街ちゃん、その・・・野村さんが親切にしてた人って女なの？

街子 うん。そもそも野村さんと知り合ったのも、旦那に蹴飛ばされて腰を打っちゃって、野村さんの病院に来たからなの。

あ・・・(潤三に) 野村さんて・・・接骨院やってるの。

潤三 だってな。

街子 え(孝也を見る)

潤三 聞いた。

街子 ・・そっか。

潤三 ・・三十二の娘がいるんだってな。

街子 あ・・・それも知ってた・・・。

孝也 それで、その親切にしてた女ってのが死んで、どうしたんだよ。

街子 うん・・・野村さんね・・・その人の子供を引き取りたいって言うのよね。

潤三 なんだと!?

街子 三歳になる男の子で、ひとりぼっちになっちゃったの。
孝也 ちよつとまでよ。まさか、その男の子って、野村ってやつ
の・・・。

街子 ううん、そういうことじゃないのよ。ただ、ほっとけない
って・・・野村さん、言うんだ。

孝也 ほっとけない？なんだよそれ。

街子 野村さんて、そういう人なんだ。このまんま、あんな父親に育てられたら、悪の道突っ走るだけだって。

孝也 だけどツ。

街子 とにかくね、野村さんはね、そう言うのね。

潤三 ……。

風鈴、ちりりんと鳴る。

孝也 街ちゃん、その子、ホントに野村の子じゃないんだろうな。

街子 それだけは信じてほしいって。

孝也 ふうん……。けど、それにしちや、ずいぶんお節介な話じゃないか。なあ、オヤジさん。

潤三 ……まあな……。

街子 でも、そういう人なのよ。

孝也 その話、信じるとしてもだよ。

街子 嘘なんか言わない人よ。

孝也 その子・ひきとれないんじゃないのか？

街子 え？

孝也 だって、オヤジがいるわけだろ。どんなひどい奴か知らないけど、親権はそいつにあんじやないの？だよね、オヤジさん。

潤三 ……ああ、そうだろうな。

街子 でもね、野村さん、絶対に、あんなやつには子供をまかせておけないって。だから、出るところに出ても、裁判してで

も、自分の子にしたいって。

孝也

なんでそこまでするんだよ。

街子

・・・だから・・・そういう人・・・。

潤三、枝豆をひとつ・・・かじる。

風鈴、ちりんと鳴る。

孝也

それで・・・街ちゃんは、どうなるんだよ。

街子

野村さんね・・・あたしとのことはなかったことにしてくれ
って・・・そう言うんだ。

孝也

え？

街子

とうさんにも、くれぐれも申し訳ないと伝えて欲しいって。

孝也

なんだよ、それ。街ちゃんよか、ガキの方が大切だったの
かよッ。

街子

(大きく首をふって) いきなり、なんの縁もゆかりもない
子の母親にさせるわけにはいかないって・・・。

孝也

そりやそうだけど・・・。街ちゃんは・・・いいのかよ。

街子

・・・(潤三を見る)

潤三

(ちよっとギクツとするが) いいも悪いもないぞ。だいた
いが、親子ほども歳がはなれているってだけでもずうずう
しいのに、小さい子供までくっついてるなんて、話になら
ん。街子にだって、これから子供ができるかもしれないん
だし。

街子

それは、あたし考えてないよ、とうさん。

潤三

ばか言うな。

孝也 そうだよ。街ちゃんはまだ若いんだから、これからいくらだつて。

街子 あたし、もう三十よ、孝ちゃん。

孝也 三十二だろ。

街子 あ。

孝也 どさくさに紛れてセバよむんじゃねえよ。

街子 ・・・(呟く)だから、幼なじみって嫌さ。

潤三 どっちにしても、向こうがことわってきてるんだから。もういいだろう。ま、縁がなかったというか、よくあることだ。

孝也 そうだね。のがして惜しい縁でもない訳だしさ。ね、オヤジさん。

潤三 おう、そうだそうだ。かえつてのがして幸いってやつだ。

孝也 その通り。

街子 ・・・。

潤三 ・・・。おい、街子、お前、晩飯食ったのか。

街子 ・・ううん。

潤三 しょうがねえな、こんな時間まで。来々軒でなんかとるか。

おい、孝也、電話しろ。

え？

潤三 腹がへったぞ。減らないのか、お前は。

孝也 そういえば減ったな(ト、メニューを取り出して)なににしようか? ・・・そうかあ。街ちゃん、こんな嵐の中、呼び出されて、そんな話、聞かされてたのか。ひでえ目にあつたな。

街子
ねえ、とうさん。

潤三
（無視して）パーツととれよ。ケチケチするな。

孝也
うん。まず、中華井と酢豚と・・・街ちゃんなに食いたい？

街子
（うつむいている）なんでもい・・・。

潤三
・・・。

孝也
（メニューを見ながら）そーゆーのが一番こまるんだよな

あ。オヤジさん、これ、なんて読むんだっけ？

潤三
・・・チンジャオオロス・・・（街子を気にしている）

孝也
そっか。チンジャオオロスか。これ、いつてみる？

街子、目をこする。

潤三
街子。

街子
お風呂入ってくる（ト、去る）

潤三
まちこ。

孝也
（電話して）もしもし、東雲鍼灸院ですけどね、出前お願いしまーす。えっとね、中華井と酢豚とチン・・・え？何？

なんでよ？・・・この天気で、バイク出せないって、そりや
ないんじゃないの。こうゆう時の出前でしょうが。頼むよ。
うちね、ちよつと今日パーツといきたいのさ。だから・・・
だめ？出前の子、帰らしちゃったあ？・・・。オヤジさん、
来々軒のやろう、出前拒んでるよ。なんとか言ってやって
よ（受話器渡す）

潤三
（受話器受けて）はいはい、どうもね（切る）

孝也
なんだよッ、なんで切っちゃうんだよッ。

潤三 うるせえんだ、てめえは（立ち上がり、奥を覗く）

孝也 オヤジッ・・あれ、街ちゃんは？

潤三 （覗いて）風呂入ってる。

孝也 風呂？・・オヤジさん、覗いてんの？

潤三 ば、ばかやろうッ。泣いてやがんだッ。街子、泣いてやがったんだぞッ。

孝也 え？

潤三 おい、孝也、なんだか、いやーな予感がするぞ。俺は、なんか、こお、このあたり（胸）がぞわぞわっと胸騒ぎがするぞ。街子のやつ、ひよっとして、野村ってやろうに、本気で惚れてたんじゃないのか。

孝也 そりや、結婚しようと思ってたんだから。

潤三 やっぱり、そうだよな。つつことはだ、もしかして、ひよっとして、今夜の状況は・・街子がふられたってことになりやしねえか。

孝也 うん・・まあ、そうだな。向こうの方から、なかったことにしてくれて言ったってんだからね。けどさ・・

潤三 （遮って）だろ。そういう時にだ、お前、酢豚だチンジャオロースだなんて、ありが。

孝也 来々軒に電話しろって言ったのはオヤジさんじゃないか。

潤三 ・・・・（奥を気にして）風呂場で泣くってのは、タチが悪いんだ。風呂の湯と同じくらいの温度の涙が、こうポトポト落ちてきてな、なんだか、自分が流した涙に浸かっているような気分になっちまってよ。

孝也 そんなもんな。

潤三 そうだよ。

孝也 経験あるの？

潤三 あるよ。

孝也 いつ。

潤三 町内の野球大会で負けてな。俺はピッチャーだったから、責任を感じてな・・悔しいのと情けないのとで、いつから我慢しようとしても、涙がどおどおと出やがる。きまり悪いから風呂に飛び込んで、おもいきり泣いたもんだ。

孝也 ガキの頃には、よくあつた話だよな。

潤三 ガキの頃？ほんの、四、五年前の話だ。

孝也 えー？

潤三 あん時、のぶえは、そんな俺を見てみないふりしてくれてなあ。ありがたかったよ・・。

孝也 ふうん、そんなじゃ、街ちゃんのこと、見てみないふりしてやったらいいんじゃないの。

潤三 男と女は違う。街子のやつ、思い詰めて、早まったことをしなけりゃいいが・・。

孝也 え？

潤三 ああッ！

孝也 な、なんだよッ！

潤三 (立ち上がり) カミソリッ！カミソリ出しっぱなしだッ。

孝也 えッ！？

潤三 街子！

ト、パジャマを着て、髪をタオルで巻いた街子が出

てくる。カミソリを持っている。

潤三 ま、まちこッ！（カミソリを奪って）早まるなッ！

街子 な、なによ！？

潤三 バカなことを考えるんじゃないッ。

街子 え？・・・ちゃんと棚にのせといてよ。

潤三 あ？

街子 危ないじゃないの。

潤三 ……。そ、そだな。

潤三、ふうつと息をついて座り込む。

街子、フト、窓の外を見て　・

街子 春の嵐か・・・。

潤三 え・・・？

街子 嵐の夜って心細いんだよね・・・。子供の頃の台風ん時・・・。

潤三 ……。

街子 なんだか・・・自分がひとりぼっちみたいで・・・。

潤三 俺たちと一緒にだったじゃねえか。

街子 （首をふって）見放されたみたい気がして・・・。

潤三 ……。

街子 あたしが死んだら、誰か悲しんでくれるのかしらって。

潤三 街・・・

街子、茶ダンスの上の鉄を手にとる。

ぎよっとする潤三と孝也。

街子、それをもとに戻し、引き出しの中などを探し出す。

孝也　　まち・・ちゃん？

街子　　（探しながら）んー？

孝也　　なに、探してるの。

街子　　・・・（探す）

潤三　　街子ッ、な、なにをしているんだッ。とうさんに言ってみろッ。えッ、街子ッ。

街子　　ええ？

潤三　　とうさんは、知ってるぞ。お前は、風呂場で泣いたな。とうさんは、ちゃんとなんだってわかってるんだ。街子、お前、そんなに野村って奴が好きだったのか。どうしたんだ、街子。俺にはわからんぞ。けど、街子・・とうさんには、まったくわからんが・・お、お前が、どうしても命を絶つというなら、飛び道具なんぞ使うなッ。とうさんが・・とうさんが、楽にいかせてやる。ぼんのくぼといってな、ここのところを・・ぶっそうなこと言わないでよ、とうさんッ。

潤三　　だ、だってお前が。

街子　　あたしがなに？

孝也　　ひよっとして爪切り？

潤三　　え・・。

街子 そうよ。引き出しにもどこにもないんだから。どこやったのよ、とうさん。

潤三 ……。そ…そんなところにあるわけないじゃないか。

潤三、台所の方へ。

街子 (覗く) うそッ冷蔵庫!?

潤三 (出てきて渡す) ひんやりして気持ちいいぞ。

街子 (啞然とする)

潤三、どっと疲れが出て、ちゃぶ台に手をついて座り込む。

街子 ……(足の爪を切る。プチンッ)

孝也・潤三 (見る)

街子 (プチン)……なんか、豆がはじけるみたいな音ね…

(プチン…)ねえ、とうさん。あたし…いろいろ考

えただけどね。

潤三 な…んだよ…。

街子 あたしね、やつぱり…野村さんと…

潤三 風呂の栓、抜いたか。

街子 え?

潤三 風呂の掃除して上がってきたかって聞いてるんだよッ。

街子 ……そのまんま。

潤三 だらしないやつめ(立ち上がる)

街子 どうさんツ、あたし……。あたしやっぱり結婚したいんだわこれがツ。

潤三 !!……。

孝也 街ちゃん……。

街子 いきなり、三歳の男の子の母親になってもいいと……。今のあたしはそういう気持ちなんだ……。おかしい？

孝也 (きつぱりと) おかしい。

街子 あんたに聞いてわよ。

孝也 六十四の男と三十二の女と三歳のガキなんて、孫をつれた父娘にみえる、絶対。

街子 見てくれなんて、どうだっていいじゃないの。

孝也 よくない。

街子 ねえ、とうさん、聞いてよ。あたしおもったんだよ。野村さんが、その子を自分の子にするっていうんなら、あたしも……。

潤三 え？……

街子 あたしも自分の子にする。

潤三 !……。

街子 ……と、いうことに決めました。すいませんツ(頭を下げる)

孝也 な、なんだよそれ。街ちゃんどうなっちゃったんだよ、頭、どうかしちゃったんじゃないの。

街子 そうかもしんないけどツ。

孝也 かもじゃねえよ、バカだよバカ。な、なあ、オヤジさん。

潤三 ……。

孝也　　いいか、街ちゃん、よく聞けよ。その野村ってやつ、間違
いなく、街ちゃんよか先に死ぬぜ。そしたら、街ちゃん、
どうなる？その男の子とふたりつきりになっちゃうんだぜ。
街ちゃんとなんの血のつながりもないガキと、ふたりつき
りだぞ。

街子　　いつまでも子供ってわけじゃないじゃない。

孝也　　なに言ってるんだよ、頭冷やせよ、街ちゃん。

街子　　・・・野村さんもそう言ってた。

孝也　　え？街ちゃん、母親になってもいいって・・・そう野村に言
っちゃったのッ!?

街子　　・・・うん・・・。

孝也　　うそだろッ。

街子　　言ったのッ!

孝也　　おい、オヤジさん、なんとか言ってくれよ。たまんねえな。
おい、オヤジ・・・どうしたんだよ、オヤジさん。

潤三　　・・・。

街子　　とうさん・・・。

孝也　　街ちゃんが、あんまりむちやなことばっかり言うから、オ
ヤジさん、かたまっちゃってるぞ。

街子　　とうさん？

潤三、突然、のぶえの遺影の前に座り

街子・孝也　　？

街子　　とうさん？

潤三 ・・街子・・お前、今、なんて？

街子 え？

潤三 野村さんが自分の子だっていうんなら・・

街子 ・・あたしも・・あたしの子供にする・・

潤三 ・・。のぶえッ、街子が・・街子が、お前とおんなしこ
といいやがる。街子がお前とおんなしことを・・。

風音 ・風鈴、ちりりんちりんと鳴る。

街子・孝也 （顔をみあわせる）

潤三 ・・あなたが孝也をうちの子にするっていうんなら、あた
しもそうするよ・・。

孝也 え・・？

潤三 あんたが男の子をほしがったこと、ずっと知ってたんだ
から。さと子さんが死んで、孝ちゃんはひとりぼっちにな
って、それで、あんたが孝ちゃんのことそんなに心配なら、
うちに呼んだらいい。あんたが孝也を自分の子だっていう
んなら、あたしも、あたしの子だって思えるから・・（鼻
をすりながら、笑って）のぶえ・・お前、そう言ってくれ
たよな。

街子 どうさん・・。

潤三 ばかやろう。街子に仇うたれた。

街子 え・・。

潤三 気にいらねえよ、街子の恋人なんざ、どんなやつだって気
にいらねえよ。それなのに・・よりによって、街子のやろ

うは、お前とおんなしことを……。のぶえ、お前に言われて、あんなに嬉しかった言葉を、こんだ、街子が言いやがった。それも、野村って野郎によ……くそツくそツくそツ！
むちゃくちゃ言うなよ、オヤジさん。

潤三
うるせえッ。

街子
とうさん。

潤三
うるせえってんだッ……。のぶえと話してるんだッ。

潤三、のぶえの遺影に向かい、手をあわせる。

啞然とする街子と孝也。

潤三
……。あれは、今から三十二年前……一九六六年の春は五

月のことだったよな……。

孝也
なんだよ、いきなり。

街子
(とめる)

風音。

潤三
ちょうど、こんな嵐の日のことだったな……。のぶえ(チー

ンと鐘を叩く)

街子
……。とうさん……。

孝也
なんなんだよ、オヤジ。ひとりの世界に入るなよ。三十二年前、どうしたんだよ。

潤三
(振り向いて)聞きたいか？

孝也
聞きたいよ。

潤三 どうしても？

孝也 もったいぶるなよッ。

潤三 （向き直って）あの日、臨月をひかえたのぶえは、高齢の初産ということもあり、病院に入院していた。その年は異常気象で、春から天候は荒れ模様。その日も朝から雨風が吹き荒れ、午後には気圧一〇〇〇ミリバール、最大風速・気圧の単位はヘクトパスカルじゃなかった？

潤三 昔はミリバールといったんだ。

街子 そうなの。聞いたことないけどな。

潤三 そう言ったんだッ。

孝也 そんなことどっちだっていいだろッ！それで、その嵐の日になにがあったんだよ。

潤三 さと子さんの家の床下浸水が心配で、俺は、訪ねていった。こっちの方も臨月だった。孝也、お前が腹ん中にいたんだぞ。

孝也 うん・・そうだよな。

街子 覚えてるの？あんだ。嘘でしょ。どうして覚えてるの？普通、覚えてるもんなの？

孝也 街ちゃん、俺、早く話の先、聞きたいんだ。

潤三 俺は、さと子さんひとりで、さぞかし往生しているだろうと思った。さと子さんの亭主は、長距離トラックの運ちゃんだったから、留守がちだ。その日もそうだった。さと子さんの家に行くと、案の定、さと子さんは必死で、玄関の水をかき出していた。俺は、すぐに土袋を調達してきて、玄関にならべてやった。これで、とりあえずひと安心だ。

さと子さんは、俺に感謝して、お茶を飲んでひと休みして
いってくれと言い、雨水でぬれた足をぞうきんで拭くと、
茶の間にあがっていった。

孝也
・・それから？

潤三
まだ、話さなくちゃダメか。

孝也
・・だいたい想像はつくけど・・。

街子
え？どういう想像？

潤三
孝也、お前の想像はあたっていないぞ。その時、さと子さんは
臨月だったんだからな。

孝也
あ・・そうか・・。

街子
そうよ。いったい、どーゆー想像してたのよ。

孝也
・・えっらそうに（潤三に）そんなじゃ、いったい何があつ
たっていうんだよ。話しづらいどんなことが起こったつて
いうんだ？オヤジさん、オフクロになにしたのさ。

潤三
そういう言い方はないだろ。この恩知らずが。

孝也
恩知らず？

潤三
さと子さんとお茶を飲んでいると、突然、さと子さんが苦
しみはじめたんだ。

街子
毒をもらったの!？とうさんツ。

孝也
苦しみ始めたのは、うちのオフクロツ。

潤三
陣痛だ。

街子
ええーッ！

孝也
（うんざりして）街ちゃんは、少し黙ってるよ。

潤三
俺は慌てた。慌てたぞお、孝也。

孝也
そりゃそうだ。

潤三

俺は、すぐに近所に助けを呼びに行こうとした。隣りは、印刷工の若い男だから頼りにならない。向かいの豆腐屋、あそこに確かババアがいた。よし、あのババアだと思った瞬間、ババアの息子、つまり豆腐屋のオヤジのことが頭に浮かんだ。そいつは、いい歳をして独身で、さと子さんの亭主が留守がちなのをいいことに、しょっちゅう、さと子さんに色目をつかっているのを俺はちゃあんと知っていた。ババアを呼ぶと、あいつも来る可能性がある。そしてどさくさに紛れて覗く可能性がある。あいつに見せてなるものか。俺はとつさにそう判断した。

孝也

見せ物じゃないんだぞッ。

潤三

そうこうしているうちに、さと子さんの陣痛はどんどん激しくなってきた。もう、あれこれ考えている場合じゃない。俺は決心した。俺はさと子さんに言った“産めッ、俺がとりあげてやるッ”

孝也

えーッ？む、むちゃだよッ。

街子

えらいわ、とうさんッ。

潤三

俺はさと子さんの手を握りしめ、がんばれがんばれと励ました。そして、ほどなく、孝也、お前がにゆるりと出てきた。

街子

にゆるりだって（孝也を見る）

孝也

ど、どう出ればいいんだよッ。

潤三

俺はそばの裁縫箱から立ち挟みを取り出して、へその緒を切り、雨もり用においてあった洗面器で、お前を洗った。

孝也

ひっでえ・・・。

潤三　なにがひどいもんか。男の子だよと俺が言うと、さと子さんは涙を流して、なんべんもなんべんも、ありがとうと言ったぞ。

孝也　どうでもいいけどさ・・・どうしてすぐに救急車を呼ばなかったんだよ。

潤三　そうかッ・・・そうだったか。いやあ、考えたこともなかったな、三十二年間。

街子　とにかく無事に産まれたんだからいいじゃないの。

潤三　そうだ。しかし、その後がまずかった。

孝也　なんだよ？

潤三　俺とさと子さんがほっと一息ついたところに、豆腐屋のオヤジが駆け込んできた。

孝也　え？

街子　嗅ぎつけたの？まさか、覗いてたんじゃ・・・でも、後の祭りよね。いい気味。

孝也　街ちゃんは黙ってろって言ってんだろッ。

潤三　病院ののぶえが、突然産気づいて、出産したというんだ。

孝也　えッ？

街子　あたしの出番だわ。

孝也　なんで豆腐屋が。

潤三　病院に食事用の豆腐を入れてたんだな。のぶえが入院しているのを知って、その日、がんもどきを差し入れようと、のぶえの病室に行ったんだ。

孝也　案外、いいやつじゃないか。

街子　どうせ下心があったのよ。

潤三　うちに電話をしたが、誰も出ない。それで、病院を飛び出して、俺を探してたところ、さと子さんのうちに行ったよ。うだという情報をキャッチして飛んできたんだ。

孝也　やっぱり、いいやつだよ。

潤三　知らせを聞いて、びっくりした俺は、すぐに病院へ行った。俺もびっくりしたが、豆腐屋もさぞかし驚いたことだろうよ。さと子さんの隣りで、生まれたての赤ん坊が、すやすや寝ていたんだから。あの時のやつ顔は傑作だったな。あんぐりと口をあけて、しかし、一抹、残念そうだったのを俺は見逃さなかったぞ。なんせ、さと子さんの力になってやったのは、この俺なんだからな。わっはっは。

孝也　あたま痛くなる・・・。

街子　かあさん、すごく難産だったんでしょう？

潤三　ああ、そうだ。病院に行くと、真っ青な顔ののぶえの隣りで、赤茶色の猿がギャーギャーわめいていた。その声のうるさいことといったら。

孝也　（ふんとして）俺はすやすや眠ってたんだよな。

潤三　俺は恐々、その赤茶猿を覗き込んだ。男か女か、にわかには判断しかねた。

孝也　くっくっく・・・。

街子　（ジロリと睨む）

潤三　その時、のぶえが、ふっと目を開けて・・・女だったよ、一緒に野球できないね、ごめんね、あんたと言った。俺がまた作ればいいさと言うと、のぶえは小さく首をふって、
　　瞼を閉じた・・・。

孝也 おばさんかわいいそう・・・。

潤三 ああ。のぶえは、出産の時の街子の大暴れが原因で、もう子供は出来ない体になってしまった。一時は、生命もあやぶまれたということだった。

孝也 ひつでえなあ、街ちゃん。

街子 ・・・・よくわかったわよ。

潤三 え？

街子 今のとうさんのながーい話で・・・三十二年前から、とうさんが、あたしより孝ちゃんを可愛かったってこと・・・よおつくわかったわよ。

潤三 そうじゃない、そうじゃないぞ、街子。

街子 だから、とうさん、台風になると、いつも孝ちゃんちに・・・とうさん、ホントは男の子がほしかったから・・・

孝也、すくつと立ち上がり、台所へ。

潤三 ?・・・！おい、孝也ッ、お前、腰・・・

街子 え？あ・・・。

孝也、鮭缶を手に来て ・

孝也 腰、治ってるッ。オヤジさん、腰、治ったッ。ほら、ほらほらほらッ（ト、動かす）効いたなあ、あの鍼。

潤三 ばかッ、むちやすると、またギックリくるぞ。

孝也 へへへ。大丈夫だよ（すくとんと座って）食おう、街ちゃん。

街子 え？

孝也 オヤジも、食お（缶を開ける）

風音。

孝也 オヤジさん・・・もしかして・・・その夜だったの？

街子 え？

孝也 俺のとうさんが・・・東名高速でスリップ事故おこして・・・

潤三 ・・ああ。

孝也 やっぱ・・・そっか・・・。

街子 孝ちゃんのおとうさん・・・孝ちゃんが産まれた日に死んだの？

潤三 ああ・・・そうだ。

孝也 それで、オヤジさん、嵐の日になると、俺んちに来てくれたんだ。供養のつもりだったの？

潤三 あいつが生きてりや、俺だって、なにも街子とのぶえ残して、お前んちになんか行きやしねえよ。けど・・・よりによって、お前が生まれた日に・・・それも俺がとりあげた・・・。俺は、なんだか、あいつが、俺にお前を頼んでったような気がしてしょうがないんだ。

街子 ・・・お節介だね・・・とうさん。

潤三 そうだな、あの日、俺がさと子さんちになんか行かなきゃ・・・お節介だな・・・。

街子 それで・・・さと子おばさんが死んだ時、孝ちゃんにうちに来いって、あんなにしつこく言ったんだ・・・。とうさんの

心の中では、孝ちゃんは、ずっと、自分の息子だったんだ。
オヤジさん、さつき・おばさんに向かってなんて言った。

え・・・。

孝也 おばさんに手あわせて、オヤジさん・街子がお前と同じこ
といいやがるって言わなかった・・・？

潤三 ああ・・・。

街子 ・・・・あなたの子ならあたしの子だ・・・。かあさん・・・かあ
さん、そう言ったの？

潤三 (うなづく)

街子 そっかあ・・・かあさん、そんなこと言ったんだ。だから、
台風の夜に、あたしが、どうしてとうさんは孝也んちに行
くのよってビービー泣くと、困ったような顔して、たまに
は孝ちゃんにとうさん貸してあげたっていいでしょ、街子
は毎日、とうさんといられるんだからって・・・。

風鈴、ちりん・・・と鳴る。

孝也 街ちゃん、食えよ・・・腹へってるだろ。

街子 うん・・・(食べて)・・・ねえ、鮭缶って、なんだか、嵐の
夜にあうね。そうおもわない？

孝也 う・・・うん・・・。

街子 今まで、こういう日に食べたことってなかったけど(食べ
て)うん、あうあう。

ふたり ・・・・。

街子 食べないの？

孝也 鮭缶は骨が一番おいしいんだ。だよな、オヤジさん。

潤三 ああ。

孝也 街ちゃんに全部やるよ。

街子 ホント？

孝也 うん。

潤三 食え。カルシウムだ。

街子 (食べる) ねえ・・なんだか、ちよつと食べたたら、よけいにお腹すいちゃった。なんか食べようよ。

孝也 来々軒はもってこねえぞ。

街子 えー、なんで。

潤三 (枝豆を食べる)

孝也 ・・・。(枝豆を食べる) うまい・・街ちゃんの枝豆は天下一品だ。

街子 ・・・。かあさんはあたしに、枝豆の茹で方だけしか教えてくれないで死んじゃったっておもってたけど・・・なんか・・すごいものもらったって気がするな・・。

風鈴、ちりりんと鳴る　。

孝也 ・・・街ちゃん。

街子 ん？

孝也 野村さんに電話しろよ。

街子 え？

孝也 明日、予定通り来てくださって・・・だろ、オヤジ。

潤三 ・・・そうだな・・。

街子
とうさん。

孝也
よかったら、その三歳の男の子も一緒にさ。な、オヤジ。

潤三
・・・そう言え、街子。

街子
いいの？とうさん？

潤三
ああ・・・ただし、サチヨって娘は連れてくんじゃねえとな。

M

暗転。

〔四〕 枝豆のこいびと

東雲鍼灸院の茶の間。翌日。

晴天。

潤三が、茶の間を片づけている。

ちゃぶ台の上の食い散らかした枝豆の鞘、缶ビールの
空き缶、などなど。

潤三
・・・宴会になっちまって・・・普通するかあ・・・こういう
大事な日の前に・・・

潤三、時計に目をやる。十二時半近くをさしている。

潤三
（二階の街子に）おい、街子、もう十二時半だぞーッ。

おきるッ。下かたづけろッ

襖のやぶれた部分に目をとめ、座イスで隠してみる
が・・・

潤三 変か・・・(二階の街子に)おーい、街子、なんか紙ねえか、
こー、なんか体裁のいい・・・おいッ、街子ッ。

玄関の戸が開いて、孝也、やってくる。

板前の恰好をしている。

孝也 街ちゃんなら、八百屋で買い物してたよ。

潤三 (孝也を足の先から頭まで見回して)なんだ、その恰好。

孝也 これ、俺の正装だよ。

潤三 別に、お前がめかしこむことはねえんじゃないか。

孝也 そうかな。

潤三 おめえ、今、失業中だろ。

孝也 まあ、そうだけど。

潤三 その、襟んところに書いてある“ろばた一休”っての見て、
どちらの店ですかかって聞かれたらどうすんだよ。つぶれま
したって言うのか。

孝也 そうか。やばいな、手拭いで隠すか。

潤三 それにな、お前がそういうカツコするってんなら、俺だっ
て白衣着るぞ。

孝也 えー、それはまずいよ。そんなの、絵的におかしいよ。

潤三 そんなじゃ、このまんまでいいのか。

孝也 それはまずいよ。なんかないのかよ。スーツかなんか。

潤三 スーツ？

街子、枝豆の入った袋を下げてやってくる。

明るい色のスーツをきている。

街子 なに、ごちゃごちゃ言ってるのよ（散らかった茶の間を見

て）あー、まだちらかっている。早く片づけなさいよね（台

所へ）

潤三 ほら、片づけろ、片づけろ。

孝也 それよか、オヤジ、着替えてこいよ。

潤三 お、そうだな。もう、あんまり時間ないもんな。

孝也 そうだよ。ここ、俺がやとくから。

潤三 そうか、じゃ、たのんだぞ（奥へ）

孝也 白衣はだめだぞッ。

孝也、いそいそと片付けはじめる。

台所から出てきた街子、孝也を冷やかに見つめて

街子 ……孝ちゃん。どうしても同席するの？

孝也 もちろん。オヤジさんがひとりじゃ心細いっていうしさ。

俺だって、街ちゃんの旦那になるやつつてのを見せてもらわ
なきゃな。

街子 ……その恰好、なに。

孝也 キマってるだろ。

街子 ううん。

孝也 え、そつかな。一応、これって俺たちの正装なんだけども。ほら、よく西洋料理のシェフなんかも、白衣着て、前掛けしめて、高い帽子かぶってさ・・・

街子 しなくていい、正装なんて（台所へ）

孝也 えー？そおー？・・・けどさ、Tシャツにジャージじゃ失礼なんじゃないの？

ト、孝也、ガラス戸に向いて、帽子をなおしたりしている。

奥の間から、潤三、出てくる。

ブラックスーツを着ている。

白いネクタイを手に、孝也の隣りに並んで、締めはじめる。

潤三 まったく、このネクタイってやつには往生するよな。

孝也 （ガラス戸に写った潤三を見て）なに、その恰好。

潤三 ん？

孝也 （実物を見て）へんじゃねえのお、それ。

潤三 だって、お前が、スーツを着ろって。

孝也 けど、それはないんじゃないか。まだ、結婚式じゃないんだからさ。別のないの？

潤三 ない。

孝也 そんなじゃ、ポロシャツでもいいよ。なんか、こぎれいな

選んで着てこいよ。

潤三　こぎれいなのは・・・ない。

孝也　じゃ、買ってこいよ。すぐそこに洋品屋あるだろ。あそこで、なんでもいいから、みつくるってこいよ。店のおばさんに頼めば、適当なの選んでくれるからさ。

潤三　あの店、ださくってなあ。

孝也　そんなこと言ってる場合かよッ。

潤三　なんだよッ、てめえばかりしやがって。てめえが、そんなもん着てくるから、俺が白衣着られなくなっちまったんじゃねえかよッ。

街子、枝豆の鉢を手に出てくる。

潤三を見て

街子　！なにやってんのッ、とうさんッ。

孝也　ほら、見ろ。

潤三　そんなに似合わないか？

街子　そういう問題じゃないわよッ（時計を見て焦る）わッ、もうこんな時間！

孝也　やっぱ洋品屋だよ。俺、行ってきてやるよ。

潤三　お前とは、趣味がちがうぞ。

孝也　ぜーたく、言ってるんじゃねえよッ（行こうとする）

街子　待って、孝ちゃん。そんな時間ないわよッ。

孝也　だって、こんな恰好でいいのかよ、オヤジ。

街子　いいッ。よくないけどッ、もう、いいわよッ。とにかく、

ふたりとも座って。

ふたりを座らせる。

街子 とにかく、ちょっと、落ちつきましょう。

ふたり ・・・。

街子 (ふたりを見回して) 場違いじゃない恰好してるのは、あたしだけね。

風鈴、ちりりんと鳴る。

孝也 (枝豆をさして) これも、ちょっとへんじやない？

街子 どして？お茶うけよ。

孝也 普通、お茶うけってのは、和菓子がなんかじやないの？

街子 枝豆じゃ悪い？あたしの唯一の得意料理なんだから。

孝也 きったねー、自分だけいいとこ見せようとしちゃって。自分だけ目立とうとしちゃって。

街子 孝ちゃん、あんた何考えてんの？今日は、あたしの日よ。

あたしが主役なんだよ。あたしが目立たなきゃ・・(フト、潤三を見て) きゃーッ、と、とうさんッ！

潤三、ポケットから靴下を出して、はいている。

ド派手な柄の靴下。

街子 な、なにッ、そのド派手な靴下ッ！

潤三 年末の福引きであたったんだ。ベルサッチだよ。

孝也 ベルサーチだろ。

街子 脱がしてッ、孝ちゃんッ！

孝也が、潤三に飛びついた瞬間、玄関の戸が開く音。

はっと振り向く街子。

街子 野村さんだッ（飛びだしていく）

にわかに緊張がはしる。

孝也、脱がした靴下を丸めて座布団の下にいれ

出して、くずかごに捨て、かしこまる。

潤三、咳払いをしてあぐらをかくが、素足に気づいて正座する。

玄関の方に耳をそばだてている潤三と孝也。

しーん。

潤三 ……どうしたんだ？

孝也 （覗く）

潤三 ばか、覗くなッ。

孝也 いないよ。玄関の戸、あけっぱなし…

潤三 え？…なんだよ…まさか、またなんか…

玄関から街子の声。

街子（声） 孝ちゃん、野村さん、車のー。どこにとめたらいいですかって・・・

潤三 なに？車だと？

街子（声） 孝ちゃん。

孝也 はーいッ（出ていく）

潤三 電車で来んかッ。京浜東北でッ。

孝也 （走って戻ってきて）べ、パンツだよ、オヤジさん。

潤三 なんだとッ。角の駐車場につっこんだけ。

孝也 いいの？

潤三 かまやしない。パンツなんか見たことねえ連中ばつかなんだから。おい、人だかりがしねえように気をつけろよ。

孝也 うんッ（出ていく）

ほうつと息をはいて、ネクタイをゆるめる。

潤三 ベンツか・・・。接骨院てのはもうかるんだな・・・保健だからな・・・（フト、のぶえの遺影を見る）のぶえ・・・街子のやろうが、結婚だよ・・・。

風鈴、ちりん・・・。

潤三 （枝豆をひとつ食べて）この味だ、のぶえ・・・お前の・・・街子の味だ・・・。

風鈴、ちりりん・・・

玄関の戸、開く。

街子（声）　　とうさん、野村さんがお見えよ。野村さんですーッ、とう

さんッ。

振りかえる潤三。

風鈴、ちりりんちりりんッと鳴いて・

M

幕

(初演キャスト)

東雲潤三

二瓶鮫一

東雲街子

重田千穂子

吉行孝也

相島一之